ビジネスリーダーに聞く

矢崎ネットワークシステムズ（南アルプス）磯部公克社長

電力メーター生産にDX

家庭の電力使用量を計測するスマートメーター通信ユニットの開発、量産化を進めている通信機器製造の矢崎ネットワークシステムズ（南アルプス市有野）は、自動車部品大手の矢崎総業（東京）のグループ傘下に入り、旧・富士通アイ・ネットワークシステムズから名称変更して4日で1年となる。新社長として率いている矢崎グループ出身の磯部公克氏は「新旧体制の優れた部分を吸収し合い、エネルギーの総合プロデュース企業を目指したい」と話す。

―社長に着任して1年を振り返って。

「ガスのスマートメーターなどエネルギー関連製品を手がける矢崎エナジーシステムの子会社となり、経営統合後の体制整備などに注力した。もともとあった良い文化を大切にしながら、矢崎の文化や規定を社内に浸透させていった。決算期の違いなどもあったが、徐々に新体制に移行している。昨秋、矢崎グループ全社が集まる運動会『オール矢崎体育大会』に初参加した。従業員に矢崎グループの一員になったことを認識してもらい、交流を深めた。従業員の意見を基に新ユニホームの製作も進めていて、一体感が出てきたと感じている」

―業況は。

「主力の電力スマートメーター用通信ユニットは2014年から製造し、25年までに累計2200万台出荷した。同年から第2世代の後継機に切り替えるのに合わせて、自動組み立てラインを整備していて、26年1月に年間200万台の生産体制が整った。現在納入している電力会社以外にも販路を広げ、さらなるシェア拡大を目指したい」

―強みは。

「製造現場向けのデジタル・AI（人工知能）ソリューションを取り入れ、『ものづくりDX（デジタルトランスフォーメーション）』に優れたスマートファクトリーに自信がある。先進的な取り組みとして、矢崎グループからも200人以上が視察に来ている。グループ各社と技術交流を図り、互いの優れたところを取り入れ、高め合っていきたい」

―今後のビジョンは。

「大規模災害などを想定した業務継続計画（BCP）の対応として、矢崎グループ各社と製品の一部の生産を互いに担い、補完し合う体制の検討を始めた。いずれはガス機器事業にも関わり、親会社の矢崎エナジーシステムが掲げるパーパス『地球の未来をつなぐエネルギーの懸け橋に』を実現する、エネルギーの総合プロデュース企業を目指していく」

〈聞き手・桑原久美子〉

＝次回は8日に掲載します

いそべ・きみかつ氏　浜松市生まれ、芝浦工大機械工学科卒。1986年、矢崎総業に入社し、ガス機器開発業務や営業職を経験。矢崎エナジーシステムガス機器事業部長などを経て2025年7月から現職。62歳。

愛読書　ビジネス書

趣味　地元・静岡でのミニバスケットボール指導、キャンピングカー旅行

影響を受けた人　入社して初めての上司。社会人としてのあり方など多くを学んだ

転換点

矢崎総業に入社して30年近くガス機器開発に携わっていたが、2014年に営業部門に異動した。

初めて顧客との接点の最前線に立ち、顧客の意見や要望を開発側に伝える役目となり、目線が大きく変わった。お客さまからの視点で全体を見て、考える重要性を認識できるようになった。

開発、生産、営業の現場に携わった経験が、矢崎ネットワークシステムズの社長を任されることにつながったと考え、「新しく挑戦する場を与えてもらった」と感謝する。